

## 『エスプランディアンの武勲』における異教的要素

タイトル(その他言語)	Las sergas de Esplandian y su sietretismo
著者	野村 竜仁
雑誌名	神戸外大論叢
巻	60
号	1
ページ	107-123
発行年	2009-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000475/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000475/</a>

# 『エスプランディアン<sup>1</sup>の武勲』 における異教的要素

野 村 竜 仁

## 1. はじめに

『エスプランディアン<sup>1</sup>の武勲』をめぐって、『ドン・キホーテ』の中で次のようなやり取りが記されている。

「これはですね」と、床屋が言った、「アマデイス・デ・ガウラの嫡男の物語、つまり『エスプランディアン<sup>1</sup>の武勲』ですよ。」

「ほほう」と、司祭が応じた、「でも、父親の偉大さが息子にまで及ぶはずもあるまい。さあ、家政婦さん、窓をあけて、これを裏庭に放り出してください。この本を、いずれ始まる大がかりな焚火の土台にしましょうぞ。」

家政婦は嬉々として、言われたとおりにしたものだから、好漢エスプランディアン<sup>1</sup>は裏庭に舞いおり、そこでわが身に迫る炎を忍耐強く待つことになったのである。

村の司祭と床屋は、友人だった郷土が騎士道物語を読みすぎて頭がおかしくなったのを見て、その家の家政婦とともに郷土の書斎に入り、狂気の元凶となった書物について詮議する。その結果、エスプランディアン<sup>1</sup>の父であるアマデイスの物語は許されるが、『エスプランディアン<sup>1</sup>』は火刑に処せられ

---

1 ミゲル・デ・セルバンテス、『新訳ドン・キホーテ 〔前篇〕』（牛島信明訳）、岩波書店、1999、p.55.

る。

『アマデイス・デ・ガウラ』はスペインにおける騎士道物語の嚆矢とされる作品で、現存流布しているのはガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボが編纂し、1508年に上梓した版だが、物語の原型は15世紀にはほぼ出来上がっていたと考えられている。この原型では、主人公のアマデイスが弟のガラオールや義父のリスアルテと刃を交え、また親子であるアマデイスとエスプランディアンが戦うなど、骨肉相食む物語でもあった。結末も悲劇的で、アマデイスが息子のエスプランディアンに殺されると、アマデイスの妻でありエスプランディアンの母であるオリアナは自ら命を断つ。

モンタルボが上梓した版は四つの書で構成され、このうち第三書までは基本的にその原型に沿っているが、最後の第四書と、そして『アマデイス』の続編であり、息子のエスプランディアンが主人公となる第五書、つまり『エスプランディアンの武勲』には、原型の枠組みを踏襲しつつも、モンタルボによって大幅な修正が加えられている。<sup>3</sup>

このモンタルボの『エスプランディアン』でも、アマデイスとエスプランディアンが戦ってエスプランディアンが勝利を収めるが、アマデイスは重傷を負いながらも死ぬことはない。こうした改変とともに、『エスプランディアン』にはモンタルボの主張が反映されている。

『アマデイス』は伝統的な騎士道物語、いわゆる「ブルターニュもの」の流れを汲んだ作品である。つまり『アマデイス』は思い姫を崇め、冒険を渴望する遍歴の騎士の物語であったが、『エスプランディアン』ではそうした騎士像に対するモンタルボの否定的な見解が示されている。エスプランディアンは、父であるアマデイスとは志の異なる騎士として描かれており、かつてアマデイスが怪物エンドウリアゴを倒した戦場に立ち、次のように述べて

---

2 Antonio Rodríguez-Moñino, <El primer manuscrito del "Amadís de Gaula">, *Boletín de la Real Academia Española*, XXXVI (1956), pp.199-216.

3 Garcí Rodríguez de Montalvo, *Sergas de Esplandián*, Ed. de Carlos Sainz de la Maza, Madrid, Editorial Castalia, 2003, pp.24-25.

いる。

...la diferencia que entre él y mí avrá será que las fuerças que Dios me diere serán empleadas contra los malos infieles, sus enemigos, lo que mi padre no fizo.

（私と父の違いがあるとすれば、私は神が与えてくれたこの力を神の敵である悪しき異教徒どもに対して行使する。これこそ、わが父がなしえなかったことだ<sup>4</sup>）

（括弧内拙訳）

エスプランディアンがアマデイスを超えるのは、騎士としての力量もさることながら、その志にあると言える。アマデイスにとっては愛するオリアナこそが絶対的な存在であったが、エスプランディアンは自らを神の使命を果たす騎士として位置付けている。エスプランディアンにもレオノリナという思い姫がいるが、レオノリナのもとへ伺候するよりも、キリスト教徒の騎士としての務めを優先させている。

エスプランディアンが活躍するのは、コンスタンティノーブルをめぐる異教徒との戦いである。その中でエスプランディアンは、キリスト教徒が結束して戦うことを呼びかけている。『エスプランディアン』が執筆されたのはカトリック両王の治世にあたり、その背景には、王位継承をめぐる当時の政治的な争いや、レコンキスタの最終局面となるグラナダをめぐる攻防があった。『エスプランディアン』は、こうした当時の社会状況を踏まえ、キリスト教徒に十字軍的な精神を鼓舞する目的で書かれたと解釈することができるだろう。

本稿では、モンタルボによってキリスト教化された騎士道物語と言われる『エスプランディアン』の、異教的な部分について考えてみたい。

4 *Ibid.*, pp.338-339.

## 2. 『エスプランディアン』における改宗者

ジュディス・ホワイトナックは、改宗者という視点からスペインの騎士道物語について論じている。その中で『エスプランディアン』における改宗者についても取り上げられているが、『アマデイス』に改宗者がほとんど見られないことを考えると、これは『エスプランディアン』の特徴の一つと言っていいだろう。

『エスプランディアン』における重要な改宗者として、ジュディス・ホワイトナックは二人の人物を挙げている。一人は巨人のフランダロで、元々は異教徒の海賊であった。フランダロは、まずエスプランディアン<sup>5</sup>の盟友で、彼とともに騎士に叙任されたマネリと出会う。マネリは仲間とともに冒険の旅に出たが、ある島にたどり着いたところで船を失ってしまい、そこから出られなくなる。困窮していた彼らの前に、海賊であるフランダロがやってくる。フランダロの船には、エスプランディアン<sup>6</sup>の使者としてコンスタンティノーブルに向かっていたカルメラが囚われていた。フランダロは、このカルメラの身柄を争う形でマネリと戦い、敗れてコンスタンティノーブルに連行される。そこで皇帝から、異教を捨ててそれまでの悪しき行いを改めることを条件に罪を許される。その後エスプランディアンと出会ったフランダロは、彼の言葉を入れてキリスト教に改宗し、エスプランディアンとともに異教徒との戦いにのぞむ。そしてエスプランディアンに戦術を授けたり、あるいは自ら軍を率いて戦うなど、戦場におけるエスプランディアンの片腕とも言える存在となって活躍する。

もう一人の改宗者はカリフォルニアの女王カラフィアである。アマゾネスたちの女王であるカラフィアも、最初は異教徒の陣営に加わり、エスプランディアンたちと戦う。美しく、また武勇の誉れ高いカラフィアは、武勲を求めて戦いに参加し、アマデイスとエスプランディアンの親子に挑戦する。し

5 Judith A. Whitenack «Conversion to christianity in the Spanish Romance of Chivalry, 1490-1524», *Journal of Hispanic Philology*, 13 (1988), pp.13-39.

6 *Ibid.*, pp.27-28.

かしエスブランディアンの美しさに心を奪われ、配下のアマゾネスたちとともにキリスト教に改宗する。カラフィアはエスブランディアンと結ばれることを望んでいたが、彼がレオノリナと結婚して皇帝位を継いだのを見て、別のキリスト教徒を夫として与えてほしいとエスブランディアンに頼む。そしてエスブランディアンが選んだタランケと結ばれ、彼とともに故国へ帰ってゆく。

フランダロとカラフィアは明らかに改宗者であるが、もう一人、ジュディス・ホワイトナックは挙げていないが、エスブランディアンに仕えるカルメラにも改宗者としての側面を見ることができる。カルメラは、エスブランディアンと出会う以前にアルカボナという女性に仕えていた。このアルカボナは、アマディスと敵対した騎士であるアルカラウスの姉妹であり、彼らはアマディスに復讐するためにエスブランディアンの祖父であるリスアルテを誘拐する。エスブランディアンはリスアルテの救出に向かい、アルカラウスを討ち果たす。アルカボナは、アルカラウスと自分の子供たちがエスブランディアンに敗れたのを見て、自ら命を断つ。

アルカボナは英国で生まれたが、異教徒の巨人であるカルタダケと結婚して棄教した女性である。その際、それまでアルカボナに仕えていた一人の騎士が彼女のもとを去って隠者となったが、この騎士がカルメラの父である。カルメラは、主人であったアルカボナたちの死を悼み、戦いで傷ついたエスブランディアンが自分の父の僧院にいるのを発見し、殺そうとする。しかしその美しさに魅了され、リスアルテの恩恵という形で、エスブランディアンに仕えることを許される。

既に述べたように、カルメラはエスブランディアンの使者として各地に赴き、またエスブランディアンとレオノリナの取り持ち役としても重要な役目を担っている。エスブランディアンとレオノリナは、最初は相手の評判だけを聞いてそれぞれに思いを募らせ、カルメラを介して互いの意思を伝え合う。さらにカルメラは、エスブランディアンとレオノリナの初めての対面を

演出する。彼女は、宮廷への貢物としてコンスタンティノーブルに運ばれた黄金の像の代わりに、エスプランディアンが入った櫃を皇女の部屋に運び込み、密かに二人が会うための手はずを整える。機知に富んだカルメラの活躍は、『ティラン・ロ・ブラン』に登場するブラエール・ダ・マ・ビダを思わせる。

その一方で、エスプランディアンに寄り添うカルメラには、彼の愛人としての面を見ることができる。<sup>7</sup>レオノリナは、エスプランディアンへの口づけを託しながらもカルメナに嫉妬を覚え、<sup>8</sup>皇女の口づけを伝えるカルメナは、エスプランディアンに抱擁されて、至福の一時を過ごす。

Esplandián, tomándola con sus mismas manos por los carrillos, juntó la boca en aquella parte que la donzella le señaló y allí la tuvo por una peça, de manera que él con la dulçura de la sabrosa memoria de su señora Leonorina, y la donzella con el gran plazer que su apassionado corazón sentía, tuvieran ambos por bien de no ser apartados de aquel auto en que estaban fasta que la muerte les sobreviniera.

(エスプランディアンは、彼女の頬に手を触れ、乙女が示した場所に唇を寄せて、しばらくそのままの姿勢でいた。そうしてエスプランディアンは思い姫であるレオノリナへの甘美な思いに浸り、カルメラは心が熱くなり、大いなる喜びを感じた。二人は死が訪れるまでそのまま離れたいと思った)<sup>9</sup>

(括弧内拙訳)

---

7 Antony van Beysterveldt <La transformación de la misión del caballero andante en el *Esplandián* y sus repercusiones en la concepción del amor cortés>, *Zeitschrift für Romanische Philologie*, 97 (1981), p.366.

8 *Sergas de Esplandián*, op. cit., p.342.

9 *Ibid.*, p.385.

『エスプランディアン』には、これを著したモンタルボが登場する章がある。その中でモンタルボは、アマデイスやエスプランディアンの守護神的な存在であるウルガンダと出会っている。魔女であるウルガンダは、エスプランディアンたちの死を予期し、それを避けるために魔術を駆使して、アマデイスの居城があったインスラ・フィルムとともに彼らを地中に埋めた。ウルガンダに導かれてインスラ・フィルムを訪れたモンタルボは、そこで死を免れたエスプランディアンたちの姿を目にするが、その中にはカルメラも含まれている。彼女は必ずしも高い身分の出ではないが、その功績ゆえにエスプランディアンやアマデイスなど王侯たちと同じ待遇を与えられている。<sup>10</sup>

ウィリアム・トーマス・リトルは、エスプランディアンがキリスト的な性質を帯びている点を指摘している。<sup>11</sup> エスプランディアンがキリストであるとすれば、その愛人的な存在であるとともに、その業によって王侯たちとともに列せられるカルメラの二面性は、マグダラのマリアを思わせるものがあるだろう。罪深い女から聖女となったマグダラのマリアは、時にキリストと結ばれた女性として描かれるが、エスプランディアンに仕えるカルメラにも、彼に尽くす端女であるとともに、女性としてエスプランディアンを迎える役目を担っていると考えられる。

カルメラだけでなく、フランゴロやカラフィアも、エスプランディアンと出会ったことで改心し、エスプランディアンの聖戦、つまりキリスト教の布教と異教徒の改宗のために尽力する。『エスプランディアン』は、言うなれば十字軍の再現であり、十字軍の目的が聖地奪還とともに異教徒の改宗であったことを考えれば、『エスプランディアン』における改宗者の活躍にもモンタルボの意図を読み取ることができるだろう。

---

10 *Ibid.*, p.540.

11 William Thomas Little, <Introduction> a *The Labors of the Very Brave Knight Esp-landián* by *Garci Rodríguez de Montalvo*, trad. William Thomas Little, New York, Medieval and Renaissance Texts and Studies, 1992, p.44.



### 3. ユダヤ的賢者

コンスタンティノーブルの皇帝のために戦い、その皇女と結ばれるなど、『エスプランディアン』には『ティラン・ロ・ブラン』との共通点を見ることができる。この『ティラン』の中で、ティランの思い姫である皇女カルマジーナが、母である皇后を相手に騎士に求められる第一の資質について議論する場面がある。皇后は熱情こそが第一の資質であると主張するが、皇女は熱情ではなく知恵こそが第一であると反論し、次のように述べている。

たとえ血気盛んな騎士でも、知恵がなくては何の価値がありましょう？  
たしかに高貴さには、勇猛さと知恵が付き物です。でも、偉大な君主にとっては勇猛さよりも知恵の方が有益なのです。知恵あればこそ、皆に慕われるのですから<sup>12</sup>

この議論に言及しながら、アントニー・ファン・ベイシュテルフェルトは、熱情（ardimiento）と知恵（sabiduría）をキーワードにアマデイスの物語について論じている。父であるアマデイスは熱情において他の騎士に勝<sup>13</sup>り、息子のエスプランディアンは、知恵の点で優れた騎士とされる。

アマデイスとエスプランディアンは、ともに不義の子として生まれ、自らの血筋を知らずに成長する。アマデイスは生まれるとすぐに川に流され、海を漂流していたところをガンダレスという騎士に救われる。そしてガンダレスの息子ガンダリんとともに騎士として育てられる。

これに対してエスプランディアンを育てたのは騎士ではなかった。エスプランディアンは生まれるとすぐにミラフローレスの修道院へ密かに運ばれたが、その途中で雌のライオンに連れ去られる。しかし隠者ナルシアノがライ

---

12 ジュアノット・マルトゥレイ、マルティ・ジュアン・ダ・ガルバ、『ティラン・ロ・ブラン』（田澤耕訳）、岩波書店、2007、p.458。

13 Antony van Beysterveldt, *Amadís-Esplandián-Calisto : Historia de un linaje adulterado*, Madrid, José Porrúa Turanzas, 1982, pp.10-122.

オンを御して乳を与えさせ、養育する。成長したエスブランディアンは、狩猟のために偶然その地を訪れた祖父のリスアルテと出会い、ナルシアノのもとを離れて宮廷で暮らしはじめる。やがて騎士に叙任されて戦いに赴くが、そこで出会うのが新たな師とでも言うべきエリサバットである。

司祭にして医師、また年代記作家でもある賢者エリサバットは、すでに『アマデイス』の第三書に登場し、ボヘミア王の姪グラシンダの指示でアマデイスに仕えていた。<sup>14</sup>エリサバットが『エスブランディアン』に登場するのは、誘拐されたリスアルテをエスブランディアンが救出する場面である。解放されたリスアルテは、エリサバットに対してエスブランディアンの武勲を記すように命じる。『アマデイス』の序文には、エリサバットの記した記録がコンスタンティノーブルの近くにある僧院の墓で発見され、それがハンガリーの商人によってスペインにもたらされたと記されている。<sup>15</sup>つまり『エスブランディアン』は、エリサバットが書き残した記録が原典であるという体裁をとっており、言うなれば彼は『ドン・キホーテ』のシデ・ハメーテ・ベネンヘーリと同じ役目を担っている。

このエリサバットは、物語の中では主に医師として活躍している。カルタダケとアルカボナの息子であるマトロコに捕らえられ、リスアルテが幽閉されているモンターニャ・デフェンディダにやってきたエリサバットは、そこでエスブランディアンと戦って傷ついたマトロコの治療を試み、またエスブランディアンの傷の手当てをする。その後もエスブランディアンと戦って重傷を負ったアマデイスや、異教徒との戦いで傷ついたキリスト教徒たちに治療を施す。

前節で取り上げたカルメラと同じく、エリサバットもその功績によって、アマデイスやエスブランディアンとともにウルガンダの魔術で死を免れてい

---

14 Garci Rodríguez de Montalvo, *Amadís de Gaula II*, Ed. de Juan Manuel Cacho Bleuca, Madrid, Ediciones Cátedra, 1988, p. 1125.

15 Garci Rodríguez de Montalvo, *Amadís de Gaula I*, Ed. de Juan Manuel Cacho Bleuca, Madrid, Ediciones Cátedra, 1987, pp. 224-225.

る。このエリサバットは、エスプランディアンを育てたナルシアノと同じく、新たなキリスト教徒としての理想像を体現していると考えられるが、<sup>16</sup> その一方でエリサバットの知的素養には、ユダヤ的な素性をうかがわせる面がある。

当時の一般的な見解として、ユダヤ人は生まれつき学問に秀でていると考えられており、<sup>17</sup> 知的エリートである彼らが従事した職業の一つが医師であった。ユダヤ人は中世から医師として活躍し、<sup>18</sup> 1492年の追放令後も、王侯に仕えている。<sup>19</sup> 16世紀の後半にウアルテ・デ・サン・ファンによって著された『諸学における才知の検討』には、ユダヤ人がその歴史的な経緯から医師としての優れた素養に恵まれているという主張とともに、<sup>20</sup> 次のような逸話が紹介されている。

...estando Francisco de Valois, rey de Francia, molestado de una prolija enfermedad, y viendo que los médicos de su casa y Corte no le daban remedio, decía todas las veces que le crecía la calentura que no era posible que los médicos cristianos supiesen curar, ni de ellos esperaba jamás remedio. Y, así, una vez, con despecho de verse todavía con calentura, mandó despachar un correo a España, pidiendo al Emperador, nuestro señor, le enviase un médico judío, el mejor que hubiese en su corte...

(長い間病に苦しんでいたフランス王フランソワ一世は、従者にも宮廷にも自分の病気を治療できる医師がいらないことを知り、熱が上がるたび

---

16 Juan Bautista Avalle-Arce, *Amadís de Gaula: el primitivo y el de Montalvo*, México, Fondo de Cultura Económica, 1990, p. 401.

17 アメリコ・カストロ, 『セルバンテスへ向けて』(本田誠二訳), 水声社, 2008, p.132.

18 Adelina Sarrión Mora, *Médicos e Inquisición en el siglo XVII*, Cuenca, Ediciones de la Universidad de Castilla-La Mancha, 2006, p. 40.

19 *Ibid.*, p.41.

20 Juan Huarte de San Juan, *Examen de ingenios para las ciencias*, Ed. de Guillermo Serés, Madrid, Ediciones Cátedra, 1989, pp.506-523.

に、キリスト教徒の医師たちが治療法を見つけれず、彼らから有効な手立てが期待できないことを常々こぼしていた。ある時、なかなか熱が下がらないことに業を煮やした王は、スペインに親書を送るように命じた。その中で王は、我らが主君である皇帝に対して、宮廷における最高のユダヤ人医者を派遣してほしいと依頼している<sup>21</sup>)

(括弧内拙訳)

アマデイスとの戦いの後、傷が癒えたエスプランディアンはインスラ・フイルメを出航し、船上でエリサバットからギリシャ語、ドイツ語、ペルシャ語などの言語の手ほどきを受けている<sup>22</sup>。中世の時代からユダヤ人がアラビア語文献の翻訳に従事していたことは良く知られており、言葉が堪能である点もユダヤ人としての出自を思わせる。エリサバットがコンベルソであるという言及はないが、少なくともコンベルソの知識人であるための知的素養を備えていることは間違いないだろう。

異教徒の改宗をテーマにした『エスプランディアン』において、カトリック両王を称えるとともに、ユダヤ人やコンベルソに言及していると思われる次のような一節がある。

...echaron del otro cabo de las mares aquellos infieles que con tantos años el reino de Granada tomado y usurpado contra toda ley y justicia tuvieron; e no contentos con esto, limpiaron de aquella suzia lepra, de aquella malvada heregía que en sus reinos sembrada por muchos años estava, assí de los visibles como de los invisibles

(カトリック両王は、海の向こうからやってきて、あらゆる法と正義に反してグラナダ王国を篡奪し、何年もその地を占領してきたあの異教徒ど

---

21 *Ibid.*, pp.504-505.

22 *Sergas de Esplandián*, *op. cit.*, pp.315-316.

もを追いつき出し、またそれに満足することなく、長い間自分たちの王国には  
びこっていた汚らしい病、つまりあの悪しき異端を、目に見えるものも  
見えないものも含めて浄化した<sup>23</sup>)

(括弧内拙訳)

スサン・ヒラルデスは、『エスプランディアン』にはユダヤ人は登場しな  
いが、イスラム教徒とユダヤ人は同じコインの裏と表で、モンタルボの意図  
は宗教的な統一を実現することであったと述べている。<sup>24</sup>しかしアントニー・  
ファン・ベイシユテルフェルトは、宗教による国家統一を目指すカトリック  
両王の理想が、宮廷にいたコンベルソたちの意向に沿ったものであったこと  
を指摘している。<sup>25</sup>十字軍的なエスプランディアンの物語は、東方へのキリス  
ト教王国の拡張として読むことができ、王権にこうした領土拡張を働きかけ  
たのはコンベルソたちであった。<sup>26</sup>

妻のイサベルとともにグラナダを陥落させたフェルナンドは、イタリアや  
アフリカ北岸にもその勢力を拡大させている。地中海に覇を唱えるフェルナ  
ンドの姿に、エスプランディアンの物語を重ねることができるだろう。<sup>27</sup>カト  
リック王フェルナンドにコンベルソの血が流れていたことはよく知られてい  
る。諸学に通じ、王となる騎士に知恵を授ける賢者としてのエリサバットの  
姿は、コンベルソである知識人が目指すべき一つの理想像として考えること  
ができるのではないだろうか。

---

23 *Ibid.*, pp.566-567.

24 Susan Giráldez, *Las sergas de Esplandián y la España de los Reyes Católicos*, New York, Peter Lang Publishing, 2003, p.22.

25 *Amadís-Esplandián-Calisto*, *op. cit.*, p.96.

26 前掲『セルバンテスへ向けて』, p.577.

27 Susan Giráldez, <Las Sergas de Esplandian, Granada, Constantinopla y América: la novela caballeresca como portavoz de la modernidad> en *Semiótica y modernidad* (*Actas del V Congreso Internacional de la Asociación Española de Semiótica*), A Coruña, Universidade da Coruña, 1994, p.189.

#### 4. キリスト教化した魔女

アマデイスの世代の騎士像を否定し、キリスト教を奉ずる騎士となることを目指したエスプランディアン物語からは、『アマデイス』を含めた「ブルターニュもの」に対する批判を読み取ることができる。「ブルターニュもの」でもキリスト教は聖杯探求などの形で主要な要素となっているが、『エスプランディアン』では個人としての騎士の名誉ではなく、集団としての勝利に重きが置かれている。

既に述べたように、異教徒との聖戦に勝利してコンスタンティノーブルの皇女と結ばれるなど、『エスプランディアン』には『ティラン・ロ・ブラン』との共通点が多い。ただしティランが皇帝の救援要請に応じてコンスタンティノーブルへ赴くのに対して、エスプランディアンの場合は彼が騎士になる以前からコンスタンティノーブルに行くことが運命づけられていた。かつてコンスタンティノーブルで皇帝に謁見したアマデイスは、自らの血筋を皇帝に仕えさせることを誓い、その約束はエスプランディアンによって果たされることになる。<sup>28</sup>

ティランやアマデイスと同じく、エスプランディアンもコンスタンティノーブルへ向かうが、彼が目指したのは父の世代の騎士たちが求めた世俗の名誉ではなく、自分自身の魂の救済であった。<sup>29</sup> エスプランディアンは、神に仕え、自らの魂の救済を目的としており、そこには「苦行的・キリスト教的モラル」<sup>30</sup>を見ることができる。

その一方で、出版された当時から『エスプランディアン』の宗教的な正統性については疑問視する声があった。『エスプランディアン』は『アマデイス』の第五書として1510年に上梓されているが、同じ年にアマデイス一族の物語としては第六書となる『フロリサンド』がルイ・パエス・デ・リベラによって著されている。エドウィン・プレイスやエロイ・ゴンサレスによれ

28 *Amadís de Gaula II*, op. cit., pp.1176-1177.

29 *Sergas de Esplandián*, op. cit., pp.128-129.

30 *Amadís-Esplandián-Calisto*, op. cit., p.78.

ば、この『フロリサンド』の中で『エスブランディアン』について否定的な見解が示されている。<sup>31</sup>『エスブランディアン』において頻出する予言や、エスブランディアンたちが死を免れるといった点が、神の御業にもとるというのが、その理由である。

キリスト教に基づく理想の騎士像を描いた『エスブランディアン』だが、その世界は魔術に満ちている。騎士となったエスブランディアンが初めて臨むのは、かつて父アマデイスが失敗した冒険だが、この時から彼は魔女であるウルガンダに導かれている。アマデイスの場合もそうであったが、ウルガンダはその力によってエスブランディアンを助け、たとえばエスブランディアンが乗る「大蛇の船」もウルガンダの魔術によって航行する。それゆえ、後述するようにウルガンダが敵対する魔女のメリアに囚われて魔術が使えなくなると、「大蛇の船」は航行不能になってしまう。

『エスブランディアン』におけるウルガンダは、魔術とキリスト教をつなぐ存在として重要な役割を担っていると考えられる。『アマデイス』でも、ウルガンダはアマデイスたちを助け、やはり魔術を使うアルカウスと対峙していたが、『アマデイス』に登場するウルガンダが、言うなれば「ブルターニュもの」の良き魔法使いの枠組みにとどまっていたとすれば、『エスブランディアン』では、カトリック両王を称えるなどキリスト教的な世界観に準ずる姿勢を鮮明にしている。

E si a mí dado me fuesse lugar para los ver y servir, demás de les dezir algunas cosas que no saben, aconsejarles ía que en ninguna manera cansassen, ni dexasen esta sancta guerra que contra los infieles comenzada tienen, pues que con ella sus vassallos serían contentos de los servir con las personas y faziendas, y el más alto Señor de les ayudar

---

31 Edwin B. Place, <Montalvo's Outrageous Recantation>, *Hispanic Review*, 37 (1969), p.197; Eloy R. González, Jennifer T. Roberts, <Montalvo's recantation, revisited>, *Bulletin of Hispanic Studies*, 55 (1978), p.205.

y favorecer, como hasta aquí lo ha fecho, y en el cabo les fazer poseedores de aquella gran gloria que para los semejantes guardada tiene.

(もしその両王に謁見し、彼らに仕える場が与えられたならば、私は両王の知らないことを教えるだけでなく、異教徒に対して開始した聖戦を、決してあきらめることなく、やめないように助言するだろう。なぜなら、聖戦によってこそ、臣下のものたちは喜んでその人員と財産とともに彼らに仕えるだろうし、いと高き主も、これまでと同じように両王を助け、恩恵を施すであろう。そして最後に神は彼らのような者のために用意された<sup>32</sup>大いなる栄光を手にするができるように取り計らうだろう)

(括弧内拙訳)

悪しき魔法使いであったアルカラウスは、『エスプランディアン』の冒頭で主人公によって倒されるが、このアルカラウスに代わってメリアという魔女が登場し、ウルガンダと対峙する。メリアは、ペルシャの王族の出身で、120歳を超える高齢の老女だが、魔術に通じている。ウルガンダとアルカラウスが善と悪の対決を象徴していたとすれば、ウルガンダとメリアは、キリスト教と異教の宗教的な対立を象徴していると言える。メリアに囚われたウルガンダは、魔術の力を失って悲嘆にくれ、自らの運命を呪う。しかし神の恩恵を願うことで、心の平穏を取り戻している。

Estava como fuera de seso desseando la muerte, porque assí la Fortuna sin lo ella merescer en tanto grado la atormentava... la Fortuna, rebolviendo su rueda, presto lo podía reparar. E aviendo este conocimiento que los cuerdos en las tales afrentas aver deven, començóse a consolar, rogando siempre al muy alto Señor en cuyo servicio, con todo encendimiento de su voluntad, en aquella estraña tierra era venida, que

---

32 *Sergas de Esplandián*, op. cit., p.546.



la oviesse merced y la sacasse de allí porque alguna tentación mala no la fiziese desesperar y poner la su ánima en condición, y que con doblado cuidado tornaría contra essa mala gente, amigos del Enemigo malo, porque la su santa fe fuesse acrecentada.

(身におぼえがないにもかかわらず、運命によってこれほどの苦しみを味わったウルガンダは、分別を失い、死ぬことを考えた。(…)しかし運命がその輪を回転させれば、すぐにその苦しみは解消されるであろうと考えた。辱めを受けた時に賢明なる者が抱くべきこの考えによって、ウルガンダは慰めを得ることができるようになり、その意志のすべてを燃え上がらせ、自らが仕える、いと高き主に対して、連行されてきたその見知らぬ土地においても、悪しき誘惑によって絶望に陥り、自ら命を断つことがないように恩恵を授かり、そこから救い出されることを祈念した。また自らの聖なる信仰をさらに高めるため、重々注意して悪しき敵に与する悪しき者どもとふたたび対峙できるように願った)<sup>33</sup>

(括弧内拙訳)

このように『エスプランディアン』では、魔女であるウルガンダの心の葛藤が描かれている。エスプランディアンが自らの魂の救済を求め、伝統的な遍歴の騎士ではなくキリスト教を奉ずる騎士を目指したのと同じく、ウルガンダも異教的な魔女から、神に帰依するキリスト教徒としての魔女に変貌を遂げていると考えることができるだろう。

## 5. むすび

カトリック両王が国家としての統一を重視し、その礎をキリスト教に求めたことは周知のとおりである。そしてその理想を実現するために、異端審問所が設置され、ユダヤ人の追放などが行われた。『エスプランディアン』で

33 *Ibid.*, pp.639-640.

は、こうしたカトリック両王の「聖戦」が称えられているが、本稿で見たように、その物語世界には異教的な要素が盛り込まれている。

『国語問答』の中で、フアン・デ・バルデスが騎士道物語について次のように述べている。

私の生涯の最良の時代の10年を、私は宮廷に仕えて過しましたが、この間中、私はこういう嘘っぱちを読むことだけに没頭し、それ以外のまっとうな仕事はしなかったのですが、この本読みがすっかり気に入ってしまった<sup>34</sup>、他のことは何も手につかないくらいでしたね。

騎士道物語は、真実味の欠如ゆえに、16世紀、特に対抗宗教改革の時代に多くの批判にさらされたが<sup>35</sup>、『エスプランディアン』では真実味の欠如につながる魔術の存在が否定されることはない。同時に伝統的な騎士道物語を批判し、キリスト教的な騎士の理想像が提示されている。自らの魂の救済を目指し、聖戦によってキリスト教の版図を広げようとするエスプランディアンは、キリスト教徒でありながらも世俗的な名誉を追い求めるアマデイスの世代の騎士を叱責する。そして血筋にとらわれることなく、神に奉仕する信仰を重視し、改宗者たちの協力も得て、自らの理想を実現しようとする。

十字軍的な性格を持つ『エスプランディアン』は、一種の護教、あるいは宣教の物語として読むことができる。そこで標榜されているのは、宗教改革の時代を迎えて台頭してくるセクト主義的なキリスト教ではなく、魔術などを含めた包括的な、言うなればルネサンス的なキリスト教であったと言えるだろう。

---

34 フアン・デ・バルデス、「国語問答（翻訳・7）」（中岡省治訳）、*Estudios Hispánicos*, 9（1983）, p.30.

35 アメリコ・カストロ、『セルバンテスの思想』（本田誠二訳）、法政大学出版局、2004、pp.80-81.